

1.第1回「長谷地区のまちづくりを話し合う会」が開催されました。

前日の山桜資源調査に続いて、15日は、来春の学校統合により廃校となる長谷小学校を舞台とする「長谷地区のまちづくりを話し合う会」を開催しました。この「話し合う会」には、「柴北川を愛する会」の会員を主体に19名の地域の方々が集まり、共助研のメンバー9名とともに、約3時間をかけて、長谷地区の宝物や問題点、さらにこれからの10年後の地区の姿などについて話し合いました。

■ 小学校体育館を会場として、準備開始

前日の山桜資源調査での興奮と適度な疲れを、前夜の三重町の居酒屋での楽しい反省会とホテルの大浴場(?)で癒した一同は、さわやかな秋空がひろがる長谷小学校へと出向きました。

小学校の体育館をお借りした会場では、早速「長谷地区のまちづくりを話し合う会」の開催に向けた準備に入り、演壇上に高く横断幕を掲げるとともに、卓球台を使ってワークショップのための卓を3つ配置するなどの準備を行いました。

学校活用班のメンバーは引き続き「話し合う会」の進行に関する会議を進めましたが、その間に山桜班のメンバーは、大塚会長の先導の下に、昨日は手つかずであった松巖寺裏の山桜調査に入り午前中いっぱい現地作業を進めました。

「話し合う会」の開始前には、長谷小学校の教頭先生に先導していただき、主に地域の方々の参加による小学校内施設の視察を行いました。地域の人々も、日頃は小学校の校舎内を視察する機会がなく、パソコンなどの新しい施設・器材の揃った環境に感心しきりの様子でした。

■ 「長谷地区のまちづくりを話しあう会」の第1回を、賑やかに開催

午前中の晴れ模様から午後にかけては少し曇りがちとなり、会場の体育館も南側の窓から陽ざしが入りつつも少し肌寒さを感じられ、渡邊さんの計らいでストーブを1台、会場の真ん中に用意しました。「愛する会」の会員主体で集まった皆さんの顔ぶれは、若い方や女性も混じった19名で、集落や男女、年齢が適度に混ざった3つの班(赤組、青組、黄組)に分かれました。

定刻の13時から、全体司会の渡邊事務局長が開会をつげ、「愛する会」の大塚会長から、「この地域がどのように発展したらよいか、人をいかにして集めるかを話し合いましょう。」と、あいさつがありました。

続いて、当日のプログラムについて説明があり、ワークショップの進行を受け持つ共助研メンバーひとりひとりの紹介が行われました。

さらに渡邊事務局長より、この「話し合う会」を開催するに至ったこれまでの経緯が紹介され、今回の話し合いにより、地域のまちづくりの方向性、及びその中で学校跡地の活用方法を見定めることの重要性が説明されました。



大塚会長による開会あいさつ

各班の参加者（敬称略。■は、共助研メンバー）

赤組	甲斐能美、穴見克美、樋口貞男、大塚義則、八坂孝範、大塚勝枝、安藤恒美、高木広記、■赤星文生、前田武、■矢ヶ部輝明
青組	大塚松信、安藤邦男、赤峰映洋、後藤梅生、渡邊さみ子、■幸野敏治、■波木健一、■森脇亨
黄組	大塚智代、甲斐克彦、穴見純一、高野和幸、穴見久義、渡邊雪法、木寺佐和記、■玉田孝二、■波多野建志

■ 赤組、青組、黄組のテーブルで、活発な議論

前半のあいさつや全体説明が終わると、共助研の前田さんに全体進行役が移り、ワークショップの進め方に関する説明が行われ、そしていよいよ、3つのテーブルごとで共助研メンバーの進行により話し合いが始まりました。

まずは、テーブルごとに参加者ひとりひとりの自己紹介を行い、お互いの顔・名前を確認するとともに、楽しい冗談を混ぜながら話し合いの雰囲気作りを行いました。

続いて、参加者が長谷地区の暮らして感じている「良いところ（地区の宝物）」と「悪いところ（地区の問題点）」を書き出してもらい、それを一人ずつ発表しながらテーブルに広げた白紙に張り込んでKJ法でまとめ、さらに、出された意見に関する他の皆さんの感想や考えを出しあいました。

ひととおり「良い点」「悪い点」が出そろったところで、これらの事項がこれからの10年間でどう変わっていくかを検討し、「今後、良くなっていくこと」「今後、悪くなっていくこと」などに分類しながら、これからどのように地域の活動に取り組んでいくかを話し合いました。



黄組の会議風景



赤組の会議風景



青組の会議風景

最後に、各班ごとに出された意見や考えを1~2枚の大判紙にまとめ、これを使いながら、「青組」「赤組」「黄組」の順番で代表の方より発表していただきました。発表者の関心がある箇所ばかりの細かな話になったり、逆に書かれていない意見まで披露されたりと発表の仕方はいろいろでしたが、

皆さん約束の10分間を超える熱弁をふるわれ、他班の方もひとつひとつにうなずきながら、聞き入っていました。(出された意見のまとめを、2.に整理しています。)



班別の発表会の様子

■ 安藤顧問によるわかりやすい総評

3つの班の発表後、「愛する会」の安藤顧問より、今回の「話し合う会」の意義、及びこれからの取り組みの方向性について、大変わかりやすく総評していただきました。



安藤顧問による総評

◆ 安藤顧問の総評 ◆

- ① 話し合うことで、地域や自分の足元を見つめることが大切。地域には良い点も悪い点もあるが、良い目で良い面を見つめることが大切。
- ② いいことが、たくさんあがってくると、希望が膨らむし、夢が描け、元気が生まれる。
- ③ 地域づくりは、一人ではできない。皆で進めることが大切。これにより、人と人との絆の大切さを学べる。
- ④ 自己紹介などを通して、出会いの楽しさがあった。共助研の皆さんと知り合い、いろいろなことを楽しく学ぶことができた。
- ⑤ 最後に、これもこれも祖先が築いてきたものあっての今がある。命のつながりもあるが、先輩諸氏による数々のご苦労、努力があってこそ今があることを忘れてはいけない。

■ 閉会及び次回に向けた反省会

13時から3時間に及んだ「話し合う会」もいよいよ閉会となり、最後に、共助研を代表して赤星副会長より、今日の感想を含めて意義深く楽しい会であったとのあいさつがありました。

いつの間にか、陽ざしも斜めに射して外気温も少し下がっていたようですが、参加者の皆さんはそのまま残って会場の片づけを行い、3時間の話し合いの余韻をしばし感じながら帰宅の途につきました。

その後、大塚会長、渡邊事務局長及び共助研メンバーは会場に残り、今回の反省や次回の進め方について話し合いました。そして、17時前に解散し、校庭に止めたそれぞれの車で長谷小学校を後にしました。

◆ 第1回話し合う会に関する反省点等 ◆

- 参加者が全員「愛する会」の会員であった。今後の組織づくり、体制づくりにおいては、十分な事前検討が必要だ。
- 若い人の参加があったが、同級生等との仲間意識が強く、若い人の参加を促すきっかけとなる。
- 班内で一人、最初は「よくわからん」と言いつぱなしていた人がいたが、話が進むといろいろと具体的な話や発想が聞けた。こういう人が参加してくれることで、大きな可能性を感じる。
- 「愛する会」の主導で、地域への広がりに限界を感じていたが、今日は区長さんも参加していて雰囲気も良かった。
- 「愛する会」だけでは進められない。他の会とお互いに協力し合ってできる体制を作りたい。
- 今日参加された方の雰囲気を、共助研のメンバーの感想として記録に残しておきたい。
- 第2回の進め方としては、まちづくりの中で学校の活用方法を位置づける検討が必要。地域おこしのテーマを見つけたい。
- 第2回は、テーマを絞って少し掘り下げて議論したい。
- 今日の「話しあう会」の様子と次回の案内をする「柴北川花いっぱいふる里づくり便り」を編集し、次回開催の1週間前に配布できるようにする。
- 山村再生プランの報告会については、4月以降に行うことで進めたい。

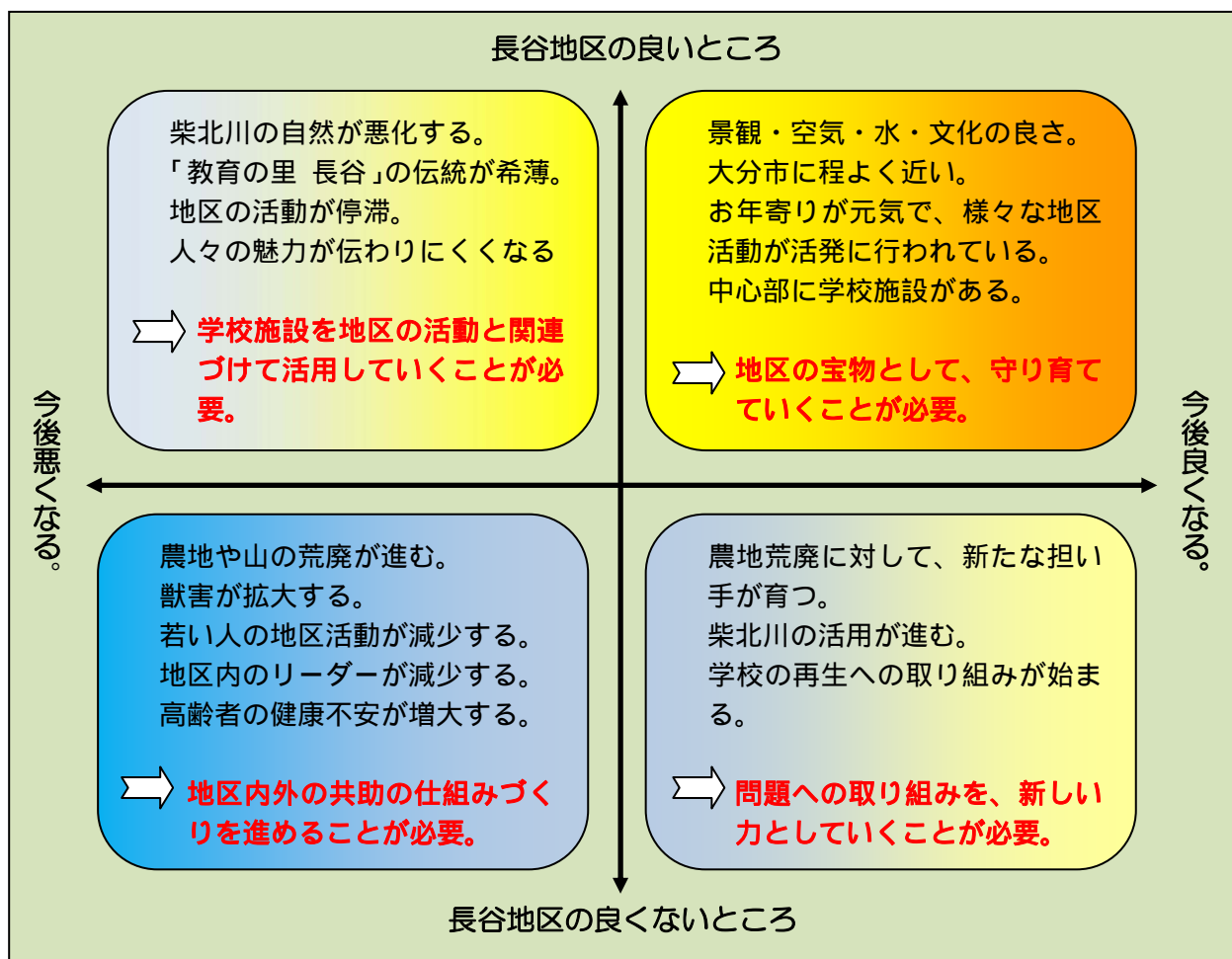


朝、学校に向かう途中で見かけた
銀杏の見事な黄葉

2. 「話し合う会」では、長谷地区の「良い点」「悪い点」を確認しました。

「赤組」「青組」「黄組」では、それぞれの参加者の特性により話されたテーマに違いがありましたが、全体としては全班とも同じようなまとめがなされました。

全班で出された意見等を統合してまとめると、以下のように整理されます。



今後の取り組みとして提案されたこと

- 良い自然を残すためのテーマを絞り込む。
- ホテル・米・星などの地域資源を次世代に継承する。
- 地区への関心を高めるために、ファンクラブをつくる。
- 地区内の良い人柄を継承する。
- 親・祖父母の背中を見る学びの場をつくる。
- 世代間・地域間・団体間のコミュニケーションを密にする。
- コミュニケーションの拠点をつくる。
- 越境入学により、小学校を復活させる。 など

長谷地区の今後の10年間を考える際に、共通した社会背景として最も強く意識されたのは「地域住民の高齢化」でした。

現在活動しているリーダー達が年とっていくのに、後を継ぐべき若い世代が地域に定着しない、定着できない。さらに、それに輪をかけて、地域の様々な暮らし方や文化を若い世代に継承する場でもあった「小学校」が無くなってしまう。

多くの中山間地域集落で起きつつあるこれらの問題が、間違いなくここ長谷地区においてもその将来に暗雲としてたれ込めようとしています。

しかしながら、その問題構造をしっかりと認識し、今からでも手を打っていくことの必要性を痛感している人々が、この長谷地区にはたくさんおられることも確認できました。

第2回の話し合う会では、共助研の所有する多くの情報や提案力を援用しながら、長谷地区の皆さんが自力で進んでいけそうな道筋を、是非見つけていきたいと考えます。

(文責 波木)

第1回 長谷地区のまちづくりを話し合う会での意見

良いところ・資源	10年後も期待できる	<p>自然と田園の景観が良い。桜や銀杏がきれい。 空気がきれい。川の水がきれい。 長谷の特長を生かした特産品がある。 歴史的な史跡(神社、石橋等)や文化が継承されている。 大分市に程よく近い。 地区の中心に小学校の施設がある。 お年寄りが元気がある。 多くの団体が、活発に地区のコミュニティ活動を行っている。</p>
	10年後は心配である	<p>柴北川の水量が減り、葦が益々繁茂して、魚やホタルが減少する。 これまで有為な人を輩出した「教育の里 長谷」の伝統が希薄になる。 学校を活用した地区の活動が停滞する。 高齢化に伴って、地区の人々の魅力(優しさ、人柄のよさ、おもてなしの心)が後世に伝わりにくくなる。</p>
悪いところ・問題点	10年後は好転する	<p>農地の荒廃に対して、新たな担い手が育つ。 柴北川の水量を戻せば、川下りなどで人を呼べる。 学校の再生について、様々な可能性を秘めた取り組みが始まる。</p>
	10年後も心配である	<p>農地の荒廃が進む。 竹林が増えて、山の景色がどんどん変わっていく。 猪や猿などによる畑作への獣害が拡大する。 石橋の保存活動が難しくなる。 地区内に、外部に向けてアピールできるモノがない。 若い人の流出が進むとともに、地区活動への参加が減っていく。 少子高齢化が進み、地区内のリーダーが減少する。 積極性に欠け、諦め感のある気質が、益々強くなる。 地区内に医師がいなかったため、高齢者の健康不安が増加する。 廃校により、外から地区内への人の出入りが少なくなる。</p>